

Shiretoko Nature Foundation

ANNUAL REPORT

年 次 報 告

2021



SHIRETOKO
NATURE FOUNDATION



ETOBUNSHA. 1998

FSCマーク位置

公益財団法人 知床財団

ANNUAL REPORT - 年次報告 - 2021

公益財団法人 知床財団

知床財団のMission

私たち知床財団は知床半島をホームグラウンドとし、

世界遺産知床の自然を守り、よりよい形で次世代に引き継いでいきます。

野生動物やその他の自然環境の保全・管理に携わる組織として常に先駆者であり続け、

人間が自然と親しみ調和していく社会の発展に寄与します。

contents

はじめに	02
知床財団の12ヶ月	04
「知る」活動	06
「守る」活動	10
「伝える」活動	14
事業収支	18
いただいたご支援	19
賛助会員	20



はじめに

2021年度はコロナ禍にあっても歩みを止めることなく活動を続けるための試練とチャレンジの1年でした。この3年間、私たちは国の「環境研究総合推進費プロジェクト」によるヒグマの生息数などを把握する研究事業に参画してきました。また2021年度には「知床半島一体型コンテンツ業務」※を通して国立公園の利用や施設のあり方を提案するチャンスをいただきました。

これらの成果や経験は、既に取り組んでいる調査研究活動や野生鳥獣対策事業、確かな情報を提供し、持続可能な公園利用をめざす活動や自然復元の事業などと併せて生かしていくなければなりません。それによって、知床を「知り、守り、伝える」という知床財団の活動がより豊かなものになっていくと確信しています。

2021年度も多くの個人・企業の皆さんから暖かいご支援をいただきました。これらは私たちにとって大きな励みです。この事業報告を通して、地域や関係する皆さんに知床財団の活動の一端をお伝えすることができれば幸いです。

理事長 村田良介



知床財団 10年プロジェクト

10年プロジェクトは、知床財団が10年後にめざす姿を明らかにした私たちの羅針盤です。「国立公園・世界自然遺産地域の保護と利用の調和の実現」、「野生動物と折り合いとつけていく地域社会の実現」、「しれとこ100平方メートル運動の推進」及び「自主・自立の旗を立てる」の4つの大きな柱から成っています。

※環境省業務「令和3年度 知床世界自然遺産地域における“半島一体型”コンテンツ提供体制・計画策定検討業務」

知床財団の12ヶ月 ~2021年度の活動・出来事から~

2021

4月

- 知る ルサ川でのサケ・マス稚魚降下数調査開始(p.09)
- 知床五湖のヒグマ行動カメラ調査(p.08)

- 守る 斜里・羅臼の市街地を囲む電気柵の設置・稼働(p.13) →



5月

- 知る 岩尾別川でのサケ稚魚降下数調査

- 守る 100平方メートル運動地のアカエゾマツ林に広葉樹を移植
個体数調整を目的とした知床岬でのエゾシカ捕獲

- 伝える 会報誌SEEDS春号発行
斜里高校「地域みらい留学345」の生徒の研修受け入れ(通年)
その他 第1回理事会・第2回理事会(書面)



6月

- 知る 知床五湖の植生・鳥類調査
- 守る クマ活(北こぶしグループ)でウトロ市街地の草刈りを実施(p.13)
- 羅臼町内会でヒグマ対策草刈り実施(p.13)

- 100平方メートル運動地のアカエゾマツ密度調整とササ地の搔き起こし作業
定時評議委員会(書面)
2年ぶりに羅臼町でヒグマが飼い犬を襲う事件が再発



7月

- 知る 知床半島シーカヤック巡視
- 伝える 知床ウトロ学校で「クマ授業」実施(p.16)

- 会報誌SEEDS夏号発行
カムイワッカ試行事業実施
知床ディスタンスキャンペーン実施
知床羅臼ビターセンターで「ビジカフェ」開催



8月

- 知る 海洋環境モニタリングのための海洋観測機器を設置(p.08)
- カラフトマス遡上数調査開始

- ハイマツ球果痕調査・ミズナラ結実量調査(p.06)
- 知床五湖のドローン調査(p.08)

- 伝える 先端部利用の情報発信向上のための試行事業をルサフィールドハウスで開始(p.16) →



カムイワッカ試行事業を開始

落石の影響により2006年以降立入禁止となっていた「カムイワッカ湯の滝」の上流部の利用を再開する試みがおこなわれました。カムイワッカ上流部の魅力を提供するためには、怪我や混雑、ヒグマ出没といった様々なリスクへの備えが必要です。そのため、この試行事業では研修を受けたネイチャーガイドによるモニターツアーや、知床自然センターを拠点とした安全レクチャーの実施、シャトルバスへの乗り換えなど、将来を見据えた一体的な公園利用の方から検討、企画提案を行い、現地の管理運営にも携わりました。この試行事業は3年間を通して続けられる予定です。

※知床国立公園カムイワッカ地区利用適正化対策協議会
「カムイワッカ湯の滝試行事業管理運営補助業務」として実施



レクチャーを受けてシャトルバスに乗る利用者

9月

- 知る サクラマス遡上調査

- 守る 盤ノ川手作り魚道を設置(p.10)

- 伝える 「斜里っ子自然教室」を開催(p.17)
コロナ禍を受け知床自然教室をWeb集会にて実施 「半島一体型コンテンツ業務」開始(p.14) →



10月

- 知る 知床半島外(網走市・小清水町)にてエゾシカのライトセンサスを実施

- 知床の森づくりを産官学で発展させる「SOLVE for SDGs知床プロジェクト」が開始(科学技術振興機構)

- 守る 第27回森づくりワークキャンプを開催
ダイキン工業「第18回知床ボランティア」を実施

- コロナ禍によりプログラムを大幅変更して「Shiretoko Sustainable week」を開催(p.17)

- ダイキン工業支援10周年報告会(p.12) カムイワッカ試行事業実施

- シレココプロジェクト「ヒグマ対策DAYキャンプ in ルサ」開催(p.16) →

- その他 会報誌SEEDS秋号発行 第3回理事会



11月

- 守る しれとこ100m²運動地森林再生専門委員会議開催

- 伝える 羅臼町にて「クマ端会議」を開催

- その他 羽臼市街地にて干し魚を狙うヒグマが複数出没



12月

- 伝える 知床自然センターホームページリニューアルOPEN

- その他 第4回理事会

2022

1月

- 守る 冬の森づくりボランティアにて防鹿柵の巡回・補修 環境省・林野庁シカ捕獲事業開始

- 伝える 会報誌SEEDS冬号発行



2月

- 知る エゾシカの夜間銃猟捕獲の実施(p.12)

- 守る エゾシカの夜間銃猟の実施

- 伝える ゴールドワイン共同イベント「ICE WALKING」を開催 知床財団が「宇登呂灯台」の航路標識協力団体に指定推進費プロジェクトの一般向け公開シンポジウムを共同開催(p.06) 斜里町ウトロにて「クマ端会議」を開催

3月

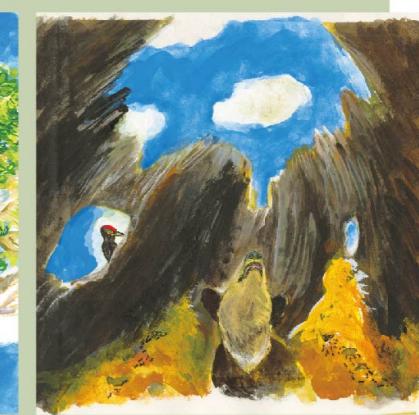
- 伝える 絵本「しれとこのみずならがはなしてくれたこと」が完成 → 知床財団ホームページリニューアルOPEN

- その他 第5回理事会 高病原性鳥インフルエンザの感染拡大

絵本「しれとこのみずならがはなしてくれたこと」が完成

知床の森を舞台にしたオリジナル絵本が完成しました。この絵本は、大昔の原生林の姿や、かつて森を拓いて暮らしていた人々の姿、開拓跡地に木を植える現代の活動まで、知床の森の歴史を年老いたみずならの木が若いヒグマに話して聞かせる物語です。作者は「しれとこのきょうだいヒグマヌブとカナのおはなし」でも知られる絵本作家あかしのぶこさん。この絵本を通して、全国の皆様に知床の森と人の歩みを伝えていきたいと考えています。

※この絵本はダイキン工業株式会社のご寄附によって製作されました。



1 遺産価値の向上にむけて

10年
project

「ヒグマ・エゾシカの保全管理手法開発プロジェクト」の成果が明らかに



ハイマツの結実調査



調査のため耳にタグを装着したエゾシカ



ハイマツの結実の様子



プロジェクトの一環として行われた一般公開シンポジウムのチラシ



調査活動が紹介された新聞記事



エゾヤマザクラの結実の様子

新知見を通じて知床のヒグマ・エゾシカの管理に貢献

2019年から3年計画で続いている環境研究総合推進費（環境再生保全機構・環境省）の知床関連プロジェクト※が2021年度をもって終了しました。このプロジェクトは、東京農工大学・北海道立総合研究機構（道総研）・北海道大学・知床財団の四者が、国立環境研究所の部分的協力を得ながら進めていたものです。

その目標は、ヒグマの新しい個体数推定法の開発、ヒグマの餌資源の年次的、地域的変動の把握、ヒグマ大量出没（知床では2012年と2015年に発生）の要因解明、エゾシカの高密度状態の維持メカニズムの解明など多岐に渡ります。

また、研究成果は「知床半島ヒグマ管理計画」における（生物学的に許容可能な）捕獲上限頭数の見直しや、ヒグマと人間との軋轢の軽減、「知床半島エゾシカ管理計画」における人為的介入（個体数調整）の必要性の検証などに必要な知見として提供されました。これらを知床世界自然遺産地域科学委員会などで活用することにより、世界遺産知床の価値向上に貢献することが本プロジェクトの最終目標です。

2021年度は、調査結果の取りまとめに主眼を置きつつも、ヒグマの糞内容分析、ハイマツ・ミズナラの豊凶調査、標識をつけたエゾシカとその子ジカの追跡調査などに引き続き取り組みました。3年間の調査・研究の成果として、まず知床半島に生息するヒグマの推定頭数が非常に高い精度で算出され、「約400～500頭」であることが示されました。これはプロジェクト実施以前の「約100～1000頭」という推定精度に比べ大きな進歩となります。

また、知床のヒグマにとってはハイマツの実、カラフトマス、サクラ類の実、ミズナラのドングリの4種が餌資源として特に重要であり、これらの食物が晩夏～秋に同時に不足するとヒグマの大量出没が起きること、大量出没の事前予測はある程度可能なことが明らかになりました。さらに、知床半島のエゾシカはヒグマによる捕食などの自然調節では低密度化せず、エゾシカの食害を受けた植生を回復させるためには、人為的なシカの捕獲が必要であることが明確になりました。

さらに、これらの研究成果を活用して、知床半島におけるメスのヒグマの捕殺頭数の上限を個体群維持の観点から検討し、2022～2027年度の6年間で108頭以下（年平均18頭以下）という数字を算出しました。この数字は、2022年4月にスタートした「第2期知床半島ヒグマ管理計画」に明記されています。

※「遺産価値向上に向けた知床半島における大型哺乳類の保全管理手法の開発(4-1905)」



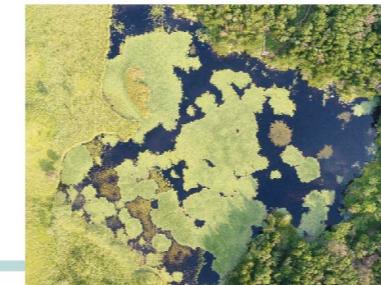
エゾヤマザクラの実を食べたヒグマの糞

2 変わりゆく自然環境と観光利用の現状を調査 知床五湖の「今」を知る

原生的な自然を楽しむために年間約30万人の利用者が訪れる知床五湖では、自然環境や観光利用の実態が年々少しずつ変化していると考えられています。動植物の生息状況や観光客の動向などを長期に渡ってモニタリングすることにより、大きな変化や深刻な問題が発生する予兆を早い段階で発見しやすくなります。自動撮影カメラやGPSカメラ、ドローンといった機材を駆使し、ヒグマが知床五湖で活動する時期や頻度、開拓期に湖に持ち込まれたスイレンの繁茂状況、渋滞の発生状況などの調査を実施しました。



駐車場待ちの渋滞調査をする職員



ドローンで撮影した一湖のスイレンの繁茂状況

5 知床の海と陸を繋ぐサケ科魚類の遡上と稚魚降下を調べる 知床のサケ科魚類モニタリング

サケ科魚類は、知床の生態系にとって海と陸を繋ぐ重要な存在であるため、「知床世界自然遺産地域長期モニタリング計画」の中で親魚の遡上数や稚魚の降下数をモニターしていくことになっています。また、知床ではサケ科魚類は漁業資源としても重要な位置を占めています。春に降下する野生の稚魚は、孵化場からの放流魚に比べればわずかですが、漁業資源を底から支えていることも明らかになってきました。私たちは長期モニタリングに関わる行政からの調査事業だけでなく、地元漁業者とも協力した稚魚調査も併せて進めています。



稚魚の降下数調査の様子



調査により捕獲した体サイズの異なるシロザケの稚魚

3 流氷下を含む1年の海水の動きや変化を調べる 知床の海洋環境モニタリング開始



船上で観測器具の準備をする様子

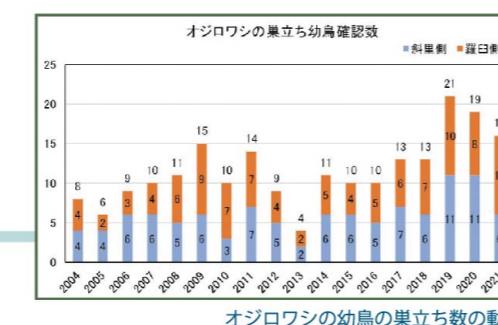
北海道大学を中心とした環境省の環境研究総合推進費による3年計画のプロジェクト研究「世界自然遺産・知床をはじめとするオホーツク海南部海域の海水・海洋変動予測と海洋生態系への気候変動リスク評価」が始まり、知床財団も研究の一部に参画しています。1年目となる2021年は、あまり知られていない流氷下の水の動きや変化を調べるために、高精度の水温塩分計を斜里沖に3台、羅臼沖に2台の計5台、地元漁協の協力のもと設置しました。得られたデータは海洋環境研究のためだけではなく、地元漁協との共有により漁業にも活用されています。

4 希少猛禽類の繁殖状況を調べる 知床半島のオジロワシを調べる

斜里町と羅臼町の有志・研究者・行政機関からなる「知床半島オジロワシ長期モニタリング調査グループ」の一員として、オジロワシの繁殖状況調査を行いました。調査はオジロワシの繁殖が始まる3月上旬頃からヒナが巣立ちを迎える7月下旬頃にかけて行われ、両町合わせて16羽の幼鳥の巣立ちを確認することができました。また、より高い精度でオジロワシの繁殖状況や繁殖成否の要因を特定するため、試行的に巣木の自動撮影調査を開始しました。



オジロワシの巣巣を観察



オジロワシの巣立ち数の動態

6 新たなガイドシステムの構築に向けて 世界自然遺産・屋久島から学ぶ



現地ガイドと情報交換を行う職員

7 地道な調査でヒグマ大量出没の要因に迫る ミズナラ結実量調査

ヒグマの重要な餌資源の一つであるミズナラ（ドングリ）の結実量調査を2019年から実施しています。ドングリの豊凶は年ごとに異なり、この年変動が市街地や農地におけるヒグマの大量出没に影響を与える一要因と考えられています。

調査では知床半島全体を6つの区画に分け、各区画で約20本の調査指標木を選定し、枝先のドングリをカウントしました。これにより、ドングリの結実量は年次的な変動だけでなく、同じ知床半島であっても地域ごとに差があることが分かりました。例えば2019年の知床半島先端部の西側（斜里）では大豊作であったのに対し、先端部の東側（羅臼）では凶作であったことが明らかになりました。餌資源の豊凶とヒグマの大量出没との因果関係を解明するためには、このような継続的かつ広域的な調査が必要です。

*環境再生保全機構の環境研究総合推進費【4-1905】による事業の一部として実施しました。

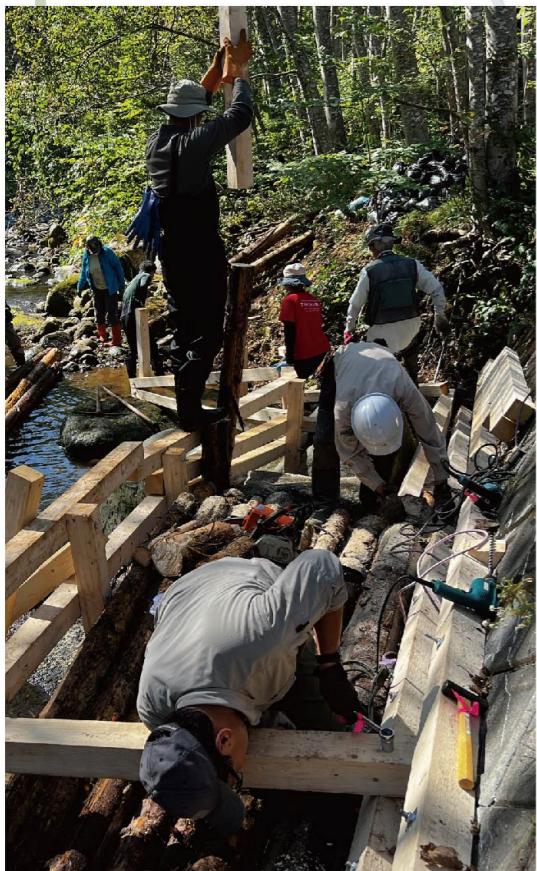
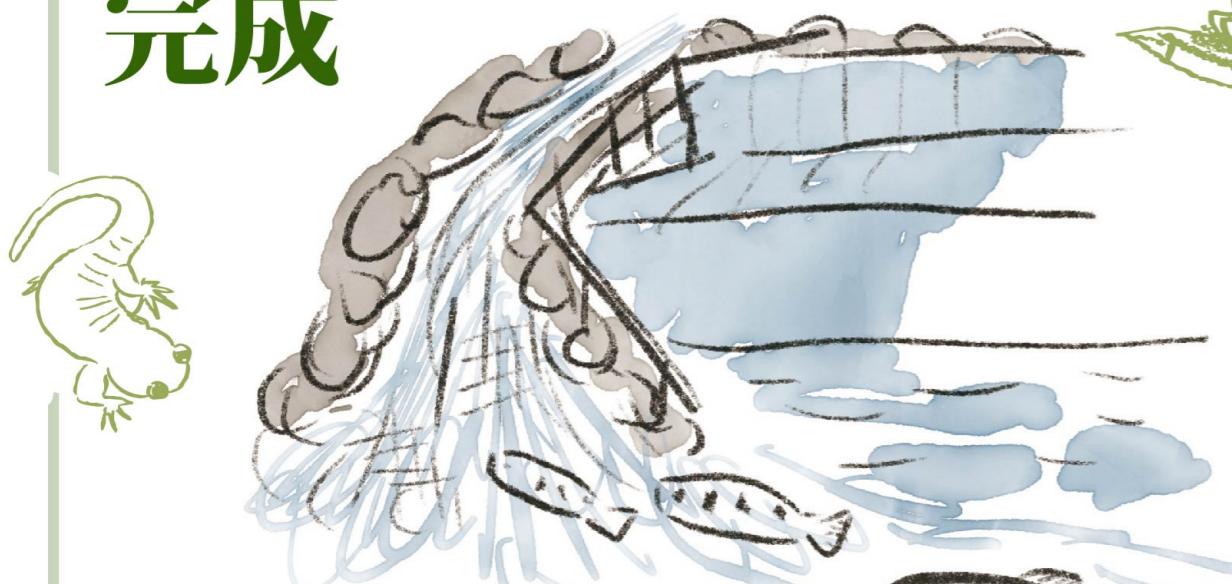


ミズナラの実をカウントする職員

1 河川環境を改善し、生物相を復元する

10年
project

待望の手作り魚道が完成



官民協働での魚道設置風景

サクラマスの回帰を目指して

私たちが現地業務を担う「しれとこ100平方メートル運動」では、岩尾別川におけるサクラマスの復元を目指して、1999年から稚魚や発眼卵の放流を行ってきました。その成果として、2017年以降は海から回帰したサクラマスが10尾以上確認されるようになっています。

しかし、かつてのような生息状況を取り戻すためには、マスの遡上を妨げる河川工作物の改良が大きな課題として残されています。今回の魚道づくりは、運動地内を流れる岩尾別川の支流「盤ノ川」の落差工を改良するために行われました。魚道は重機を用いずに設置することができるよう設計され、構造体の一部には運動地から出たアカエゾマツの間伐材を活用しました。

9月末の設置当日には、知床財団職員の他にも斜里町や環境省の職員、斜里高校生など延べ32名が集まり、官民協働で作業を行いました。アカエゾマツの角材で骨組みを組み立てる作業では、これまで防鹿柵の建設で培ったチェーンソーや穴あけの技術を駆使し、骨組みの内部に丸太や土嚢を敷き詰める作業では、足場の悪い斜面をものともしない巧みな



魚道完成時の記念写真

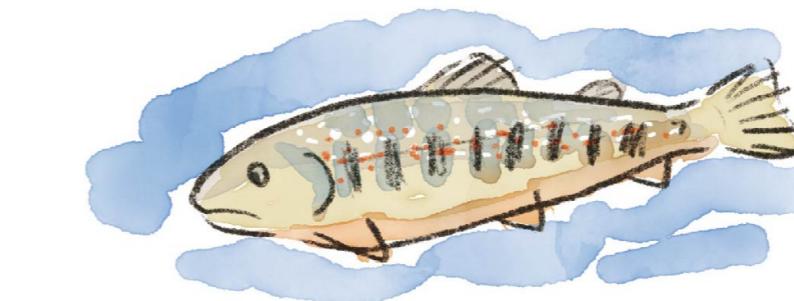
チームワークで重資材を次々と運び込みました。2日間の作業を経て完成した魚道には川の水が勢いよく流れました。

今回の魚道づくりを通じて、私たちは魚の目線で川を見るようになり、日常的に河川環境へ関心を持つようになりました。この魚道づくりは、当運動が唱える「豊かな生態系の復元」を体感できる教材にもなり得ます。

この手作り魚道が稼働し、下流側にある2基のダムが改良されれば、サクラマスの遡上域はこれまでより上流へ1kmほど延びる見込みです。11月に発生した記録的な豪雨により簡易魚道が壊れてしまう事態が発生しましたが、岩尾別川に赤く染まったサクラマスが数多く遡上する日を夢見て、私たちは挑戦を続けます。



サクラマスの遡上を妨げていた落差工の改良



設置後、水が流れる手作り魚道

2 企業と歩む森づくり

ダイキン工業 寄附事業 10周年

知床財団は、2011年からダイキン工業株式会社と斜里町、羅臼町を含む四者協定を結び、知床の自然保全活動の一部を共に進めてきました。ダイキン工業の支援は10年目を迎え、その総額は6,900万円（両町への寄附を合わせると1億3千万円）となりました。

2021年度は10年目の節目として四者が集まり、これまでの森づくりの現場での成果や、電気柵設置によるヒグマ対策効果の報告を知床財団から発表したほか、協定を結ぶ四者間でこれからも末永く知床の自然を保全していくための意見交換を行いました。

協定締結当初から始まったダイキン工業社員による知床ボランティアが、10年間で延べ196人にものぼったことも話題のひとつとして挙がり、ダイキン工業の担当者からは「森づくりは人づくり」というメッセージをいただきました。



苗畑で作業する森づくりのメンバー



防鹿柵の設置作業



3 生物多様性に脅威を与えるエゾシカの個体数調整

道内3例目となる夜間銃猟の本格的な実施



夜間銃猟はハイシートの中で行う



夜に餌場に集まっているエゾシカ

2022年2~3月、知床国立公園において猟銃を使用した日没後のエゾシカの捕獲作業を行いました。日本の法律では、銃の使用は日の出から日没までと厳密に定められていますが、今回は環境省事業として特別な許可のもとこの夜間銃猟を実施しました。

知床での実施は、洞爺湖中島、西興部村に続く道内3例目、2年目の取り組みです。前年度の試行的な取り組みを経て、2021年度は実施回数を増やし、6回で計9頭のエゾシカを捕獲しました。射手と観測手の2名は、餌場付近に設置したハイシートと呼ばれる場所でシカが出てくるまで待機します。真っ暗闇の中、シカの姿を確認するためのサーモグラフィーや強力な赤色ライトを使用して作業します。日中と異なる暗闇での作業のため、安全面には特に留意して作業を進めました。夜間銃猟は、警戒心の高いシカに対応する捕獲手法として、シカの増加に苦慮する他の地域からも期待されています。



4 荘の道も一歩から

羅臼の町を電気柵で守る



人の生活圏とヒグマの生息域が隣接する羅臼町では様々なヒグマ対策を行っています。その一つがヒグマの侵入を防ぐ電気柵です。ダイキン工業株式会社からの支援により、羅臼町の中心部と昆布番屋が連なる北部に電気柵が設置されています。

2021年度も雪が解けヒグマの活動が本格化する4月から電気柵を立ち上げ、その後も漏電の原因となる雑草の刈払いなどの維持管理作業を定期的に実施しました。

ただし、羅臼町では住宅地や漁業施設が山と海に挟まれた海岸沿いに30km以上も続いているため、人の生活圏全てを電気柵で守ることはできません。そのため、町内会による草刈りや、地元学校でのヒグマ学習などを通じて、ヒグマとの関わり方を地域課題として認識していただくための取り組みにも努めています。



民家の前までやってきたヒグマが残した足跡



ヒグマ対策のための電気柵の設置作業

5 人とヒグマ、互いの暮らしを守るために

10 years
project

地域一丸となったヒグマ対策



草刈り前



草刈り後

地域の町内会や企業が2020年に開始した草刈りによるヒグマ対策の取り組みに、知床財団も継続して参加・協力しています。草刈りは、地域が一体となって取り組むことのできる身近なヒグマ対策です。市街地周辺のヤブを刈り取ることで、ヒグマの町内侵入や潜伏を防ぐ効果が期待できます。

羅臼町では町内会主導による草刈りが行なわれ、計10町内会で157名の地域住民が参加しました。斜里町では知床財団の法人会員でもある「北こぶしグループ」によるCSR活動「クマ活」を通して、草刈りに参加された方にヒグマに関するレクチャーも実施しました。ヒグマを町に近づけない環境を保ち、人とヒグマ双方の暮らしを守っていくよう、知床財団が培ってきたノウハウを活かしながら、よりいっそう地域との連携を深めていきたいと考えています。

6 豊かな森をつくる

アカエゾマツ造林地のキクイムシ調査と間伐材の活用

「しがとこ100平方メートル運動」の発足当時に植えられたアカエゾマツ造林地は、鬱蒼とした単層林へと遷移しているため、他の植物が芽吹くことができるよう重機による間伐作業が行われています。しかし、その作業によって生じる大量の間伐木からキクイムシという害虫が発生することが懸念されていました。そこで、知床財団と横浜国立大学は共同でキクイムシの発生状況の調査を行いました。その結果、著しい虫の発生は確認されず、今後も継続して間伐を行えることがわかりました。

また、間伐材の有効利用策としてウッドチップに加工し、運動地を一般公開している「森づくりの道」に敷設する試行を行いました。ウッドチップを敷いた遊歩道は下草刈りの作業を削減でき、マダニの付着を予防する効果も期待されています。

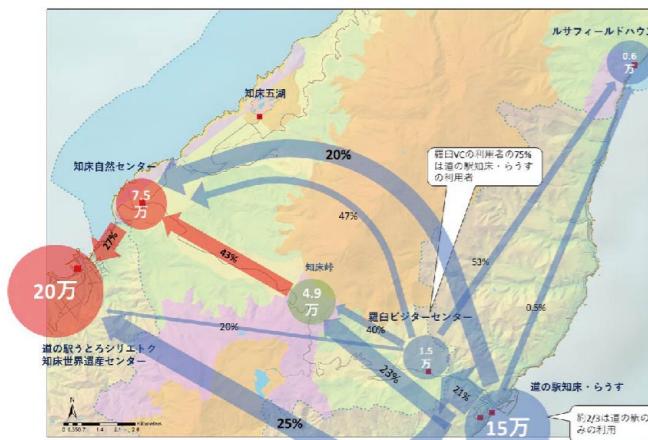


間伐材のウッドチップを敷き詰める職員

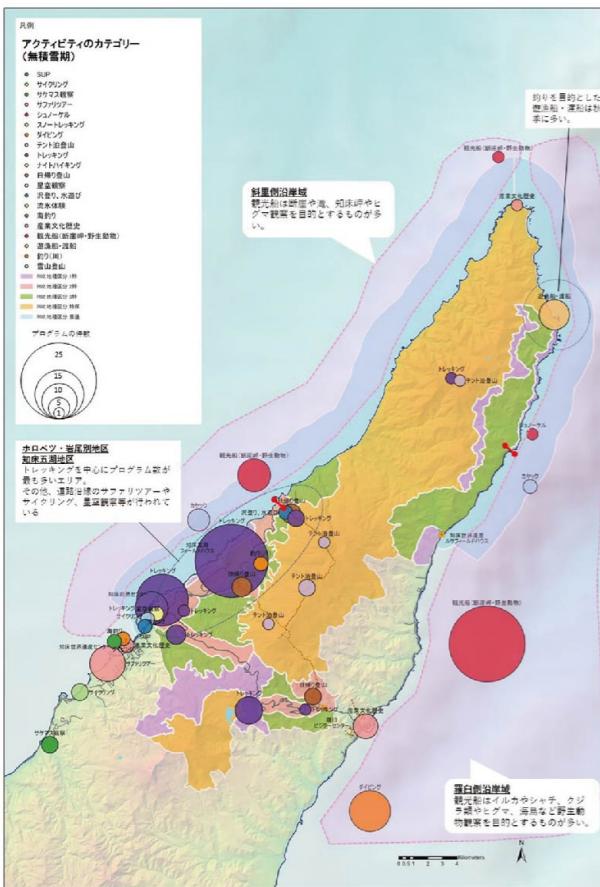
1 サステイナブルの気づきの場所としての国立公園へ

10年
Project

知床半島の 新しい利用のあり方を提案



携帯電話のビッグデータを用いた旅行者の行動調査



知床半島でのアクティビティを網羅的に分析

コロナ禍をこえて、 次世代の知床の観光へ

近年、国立公園は観光などの利用の場としても注目が高まっています。一方で、コロナ禍によりインバウンドは激減し、地域経済も大きく影響を受けています。また、2020年度には国立公園の制度も変わり、保全と利用の両方を推進するためのビジョンや計画の策定が必要とされています。

こうしたことを背景に、知床半島を一体的に捉え、今後の利用のあり方を検討する環境省業務「令和3年度 知床世界自然遺産地域における“半島一体型”コンテンツ提供体制・計画策定検討業務」を知床財団が請負い、実施しました。従来、国立公園の利用は、民間事業者や自治体を中心に行われることが多く、半島内での地域性や自然環境の差異によって、計画的な取組みやブランド形成に課題がありました。そのため、この業務では、知床半島を俯瞰し、一体的に捉える公園利用のグランドデザインが主眼となりました。

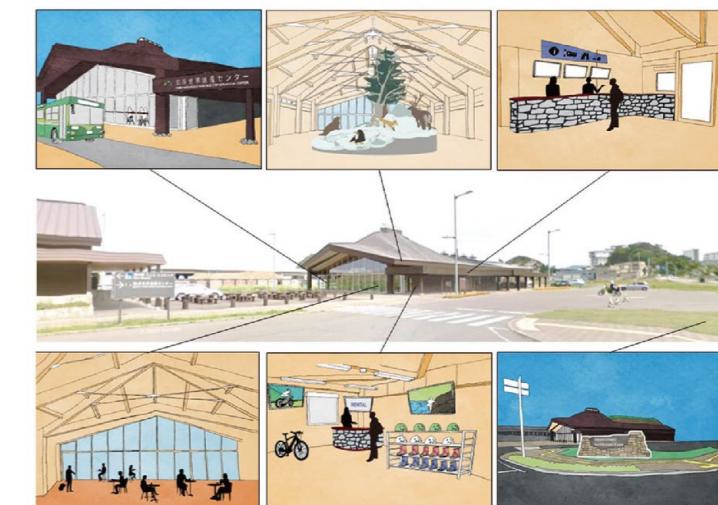
業務では、まず観光利用の現状を明らかにするため、利用者数のみならず利用者の属性や行動、意識についての情報収集とデータ分析をおこないました。データ分析にあたっては、携帯電話によるビッグデータなども用いることで、従来は把握が難しかった周遊行動や他地域を

含めた旅行行動の実情を明らかにしました。また、現在の観光スポットやガイドツアーに代表される自然体験プログラムについて網羅的に情報を収集し、今後活用が期待されるコンテンツを提案しました。

これらの結果を踏まえ、知床半島を一体的に捉えたビジョンとストーリーを構想し、その実現に向けて各施設が担うべき役割を提案しました。グランドデザインでは、過去の地域協議の結果なども踏まえながら「人の営みもどこまでサステイナブルになれるのか。利用することで得られる『気づきの場所』としての知床国立公園へ」をビジョンとしました。ビジョンに基づく利用の方針として「トレイル・ビューポイントを中心としたフィールドの整備・充実」や「世界の旅行者に選ばれる奥行きのあるコンテンツ開発」、「ゼロカーボンパークの推進、カーフリー・リゾートとしての国立公園プランディング」などを挙げています。具体的な施策として、ウトロ地域をゲートエリアに位置付けた整備の充実や公園区域の拡張などを提案しました。特に知床世界遺産センターについては、ゲートエリアの拠点として、遺産地域へアクセスする交通ターミナル機能やレクチャー機能等を備えた施設としての改修案を検討しました。また、先端部地区の利用拠点となるルサ園地については、所管地の地歴整理やルサ川の浸食状況調査を実施しました。ルサ園地では、ルサ川と海に隣接する立地を活かし、「知床の海と陸の生態系のつながりや知床の海の価値について伝える場所」として活用されるよう、園路、展望施設、親水施設といった具体的な整備方針を提案しました。



エリアごとに観光地と施設を整理しグランドデザインを提案



グランドデザインに基づく知床世界遺産センターの改修案



2 知床の人と自然の未来のために 子供たちに伝えたいこと

2021年度も斜里町、羅臼町の学校で「クマ授業」を実施しました。斜里町では2000年から、羅臼町では2007年から毎年続いているこの授業は、ヒグマの高密度生息地知床で暮らす子供たちにヒグマの生態や対処法を伝える大切な機会です。また、両町の学校を中心に、知床の生態系や森づくりに関する環境学習に協力したほか、羅臼高等学校では「知床学」というカリキュラムでも授業を担当しました。知床で生まれ育った子供たちが自らの土地を誇りに思い、自然を大切にする人に成長してほしいと願い、私たちは地域での環境学習を続けています。



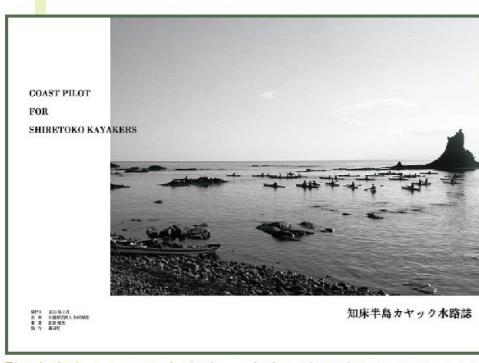
3 パックカントリー 先端部地区の魅力とリスクを発信

ルサフィールドハウスでの 「シレココ・プロジェクト」

ルサフィールドハウスは知床半島先端部地区の入口に位置し、その魅力とリスクを伝える施設です。厳しい自然環境が残された先端部地区でトレッキングやシーカヤックを行うには、高いレベルの技術や装備が欠かせません。そのため、ルサフィールドハウスでは出発前の利用者に対し、日頃から安全レクチャーを行っています。

今回の「シレココ・プロジェクト」では、この取り組みの更なる普及と魅力向上を目指して様々な取り組みを実施しました。レクチャーを受けた方々に受講証を発行し、帰着後には次の利用者のために最新のフィールド情報をフィードバックしていただくシステムを試行したほか、観音岩までのトレッキングや知床でのシーカヤック体験、ヒグマ対策DAYキャンプなど、先端部地区の魅力とリスクを楽しみながら体験できるイベントも実施しました。さらに、知床の複雑な水路や海の危険性、ルールやマナーを伝える新谷暁生氏の著作「知床半島カヤック水路誌」の改訂版を編集しました。厳しくも素晴らしい自然環境の中で、これからも安全に先端部地区を楽しんでいただくことが出来るよう、この活動を続けていきたいと考えています。

※「知床半島先端部地区利用の心得」=通称「シレココ」



「知床半島カヤック水路誌」。安全に海を楽しむための1冊

4 知床の未来をともに考えるために 「知床サステイナブルウィーク」開催

4年目となる秋のイベント『知床サステイナブルウィーク』を、行政や地元関係機関の協力のもと10月1日～10日に開催しました。新型コロナウイルスの影響により、これまで人気を博していた地元飲食店のフードブースや、メガスクリーンKINETOKOでの映画祭といった人気プログラムは中止に追い込まれる結果となりました。一方、コロナ禍を契機に「知床の持続可能性」について改めて考え、このイベントを起点に発信する取り組みを行いました。初のオンライン配信を行なった『知床サステイナブルトーク』では、地域内外からゲストをお招きし、産業や環境、エネルギー、ゴミ問題といった多様なテーマで知床の未来を語っていただきました。コロナ禍におけるこのような「伝える」取り組みは、イベントを「集客」の場のみならず「学び」の場へと深化させるものとなりました。



保全と利用の両立をキーワードとする様々なイベント

5 コロナ禍でも子供たちに自然体験活動の機会を 「斜里っ子自然教室」開催！

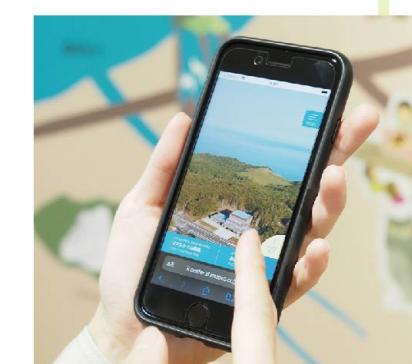
全国から集う子供たちが約1週間森の中で生活する「知床自然教室」は、コロナ禍の影響により2019年から中止が続き、子供たちの自然体験活動の機会が損なわれていることを懸念する声が上がっていました。そこで私たちは、40年以上継続してきた「知床自然教室」のノウハウを活かし、コロナ禍でも実施できる地域限定・日帰り型の自然体験活動として、「斜里っ子自然教室」を開催しました。秋晴れの下、小学4年生から中学3年生までの児童17名が集まり、キャンプ活動の技術や知床の自然について学びました。再び全国の子供たちが知床に集まる日が早く訪れる事を願うとともに、今後も私たちは地域との連携を深め、子供たちのがのびのびと自然体験できる場を創出していきます。



自ら火を起こし食事を作ることも自然体験の一つ

6 SNSで伝える 知床の今をリアルに発信

日々変化するフィールド情報や館内の展示、イベント情報や利用者の安全確保に関する情報をリアルタイムで発信するため、twitter、Instagram等のSNSの運用を継続しました。新しい試みとしては、インスタライブを計11回実施し、最新の取り組みをお伝えしました。公園内における各種イベントの情報提供や自然情報、普及啓発を目的とした紙芝居の読み聞かせやオリジナルグッズの紹介など、幅広い内容で実施したライブ配信は、リアルタイムでの視聴のほか、アーカイブでも多くの方々にご視聴いただき、遠地から知床を応援してくださる方々との繋がりを実感するものとなりました。



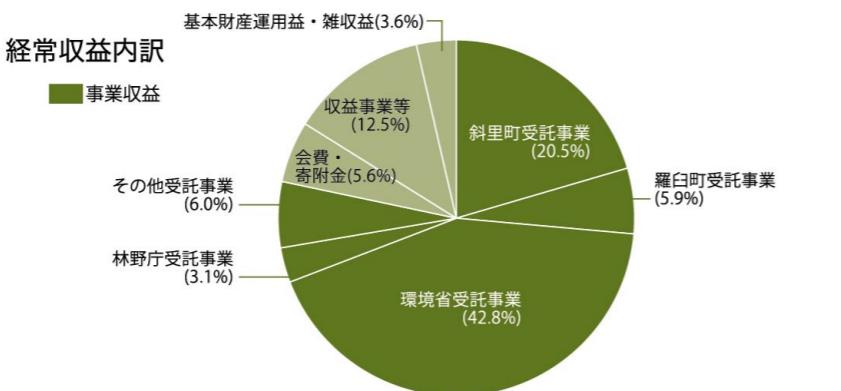
スマートフォンでの
試聴を意識した情報発信

事業収支

2021年度の経常収益は、3億9,298万円でした。そのうち約8割を事業収益が占め、その大半は行政機関からの受託事業による収入でした。
賛助会費や寄附金は、物品販売や講演・実習受入などの収益事業等は、独自事業を実施するための貴重な財源になっています。

2021年度 決算データ

正味財産増減計算書 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日) (千円)	
科目	金額
基本財産運用益	1
斜里町	80,440
羅臼町	23,350
環境省	168,031
林野庁	12,430
その他	23,475
会費・寄附金	21,905
収益事業等	49,183
雑収益	14,160
経常収益計	392,975
事業費	385,839
管理費	5,481
経常費用計	391,320
当期経常増減額	1,655
当期一般正味財産増減額	2,055
当期指定正味財産増減額	29,580
正味財産期末残高	158,319



貸借対照表 (2022年3月31日現在) (千円)	
科目	金額
流動資産 A	201,305
固定資産 B	169,821
基本財産	45,000
特定資産	107,910
その他固定資産	16,911
合計	A+B 371,126
流動負債 A	159,813
固定負債 B	52,993
① 負債合計 (A+B)	212,807
指定正味財産 C	82,860
一般正味財産 D	75,459
② 正味財産合計 (C+D)	158,319
合計	①+② 371,126

2021年度 主な受託事業一覧

■ 斜里町事業

- 知床自然センター他管理業務
- 知床五湖水道施設等管理業務
- ヒグマ管理対策業務
- 自然環境保護管理対策業務
- しづとこ100平方メートル運動地森林再生推進業務
- アカエゾマツ密度調整業務

■ 羅臼町事業

- 知床羅臼ビターセンター運営業務
- 知床世界遺産ルサフィールドハウス運営業務
- 知床世界遺産ルサフィールドハウスにおけるイベント運営業務
- ヒグマ管理対策業務
- 野生鳥獣及び自然環境保護管理業務

■ 林野庁事業

- 知床地区国有林エゾシカ誘引捕獲等事業(くくりわな等)
- 知床ルシャ川等におけるサケ類の遡上数等調査事業

■ その他

- 北海道・サケ科魚類モニタリング調査委託業務
- 知床アウトドアフィルムフェス実行委員会・MEGAスクリーンKINETOKOパンフレットデザイン制作業務
- 知床アウトドアフィルムフェス実行委員会・知床自然センターホームページ制作業務
- 知床アウトドアフィルムフェス実行委員会・知床サスティナブルフェスにおけるアクティビティ受付デスク運営業務
- 北海道農林土木コンサルタント(株)・ルシャ川小規模治山委託業務(シロザケ産卵床数等モニタリング調査)
- 知床国立公園カムイワッカ地区利用適正化対策協議会・カムイワッカ地区における自動車利用適正化対策の実施に伴う現地管理連絡調整等業務
- 知床国立公園カムイワッカ地区利用適正化対策協議会・カムイワッカ地区における自動車利用適正化対策の実施に伴う広報及び現場運営支援業務
- 知床国立公園カムイワッカ地区利用適正化対策協議会・カムイワッカ湯の滝試行事業現地管理運営補助業務
- (国大)東京農工大学・環境研究総合推進費研究共同実施事業(ヒグマ)
- (国大)北海道大学・環境研究総合推進費研究共同実施事業(海洋環境)
- パブリックコンサルタント(株)・羅臼川稚魚調査業務
- 知床ガイド協議会・知床五湖当日受付カウンター運営業務

いただいたご支援

お寄せいただきました一般寄附金は564万円、指定寄附金は3,700万円でした。
ご支援いただきました皆様に心より御礼申し上げます。

2021年度 寄附をいただいた主な法人(3万円以上)

法人名	金額 (円・物品)
ダイキン工業株式会社	5,000,000
株式会社ハイク	1,000,000
斜里町内企業	1,000,000
株式会社IAOプランニング&デザイン	300,000
三井住友ファイナンス＆リース株式会社	298,800
ワイエスインターナショナル株式会社	165,123
男山株式会社	138,080
アサヒビール株式会社	100,000
東京シティ日本橋ロータリークラブ	100,000
羅臼アポロ石油株式会社	80,000
一般財団法人22世紀に残すもの	50,000
株式会社藤田工業	30,000
日本グッドイヤー株式会社	公用車のタイヤ無償提供
羅臼漁業協同組合 定置青年会	調査用電磁流速計無償提供 (敬称略)

サポーターとともに

① コラボレーション商品の開発

賛助会員の企業を中心に、私たちの活動に賛同してくださる皆様とコラボレーション商品の開発に取り組んでいます。オリジナル商品の売上は私たちの活動の大重要な資金源です。

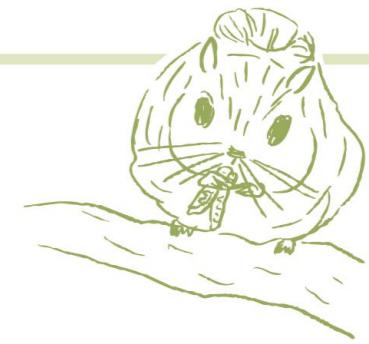


長年に渡り知床の自然保全と普及活動にご協力いただいている野生動物画家・田中豊美氏のイラストを活用したオリジナルデザインの野帳



② 物品のご提供

昨年に続き、公用車のタイヤをはじめ、現地での調査に活用する物品を企業や団体様よりご提供いただきました。



賛助会員

知床財団の活動は、賛助会員をはじめとする多くのサポーターの皆様に支えられています。2021年度は新たに108名、22団体の皆様にご入会いただきました。皆様のあたたかいご支援に厚く御礼申し上げます。

2021年度 賛助会員の状況

個人年会員	個人終身会員	法人年会員	法人特別会員	総会員数
756名	1,099名	76団体	31団体	1,962件

2021年度 法人年会員

※緑の字は斜里町・羅臼町の法人会員

法人名	所在地
株式会社ユートピア知床	斜里町
株式会社須田製版 銚路支店	銚路市
ゴジラ岩観光	斜里町
知床オプショナルツアーズSOT!	斜里町
有限会社みさき水産	羅臼町
有限会社赤岩水産	羅臼町
羅臼漁業協同組合	羅臼町
ウトロ漁業協同組合	斜里町
オコツク漁業生産組合	斜里町
株式会社辻中商店	羅臼町
有限会社木切別漁業	羅臼町
峯浜水産有限会社	羅臼町
有限会社知床ネイチャークルーズ	羅臼町
有限会社らうす第一ホテル	羅臼町
株式会社秀岳荘	札幌市
株式会社フェニックス	東京都
小川建設株式会社	羅臼町
株式会社大石アンドアソシエイツ	東京都
ピックス株式会社	斜里町
民宿鶯の宿	羅臼町
田島公認会計士事務所	東京都
サージミヤワキ株式会社	当別町
株式会社小柳中央堂	北見市
小野建設工業株式会社	羅臼町
有限会社丸大阿部商店	羅臼町
株式会社ケミクリル	羅臼町
知床ガイド協議会	斜里町
CSEG株式会社	東京都
ファームエイジ株式会社	当別町
羅臼石油株式会社	羅臼町
医療法人社団鶴翔会つるい整形外科	東京都
土橋工業株式会社	斜里町
安田商事株式会社	斜里町
株式会社ふれあい	石狩市
有限会社川上水産	羅臼町
斜里バス株式会社	斜里町
ワイスインターナショナル株式会社	東京都
株式会社キムラシステム	札幌市

法人名	所在地
株式会社アヤメ緑化工業	北見市
アリス動物病院	神奈川県
株式会社バリュープロモーション	東京都
有限会社尾崎プロパティ	埼玉県
斜里建設工業株式会社	斜里町
斜里第一漁業協同組合	斜里町
日本パトロール株式会社	愛知県
有限会社雄美	千葉県
有限会社片山電気商会	斜里町
しれとこくらぶ	斜里町
山洋建設株式会社	中標津町
山本電子工業株式会社	網走市
知床サライ	羅臼町
株式会社丸あ野尻正武商店	斜里町
株式会社新宣組	札幌市
ワンドリームピクチャーズ有限会社	旭川市
株式会社OHANA	東京都
一般社団法人斜里青年会議所	斜里町
office albireo	東京都
株式会社クリオ	東京都
斜里通運株式会社	斜里町
BlueM株式会社	網走市
民宿いしやま	斜里町
株式会社セキグチ	埼玉県
株式会社藤田工業	神奈川県
有限会社阿保水産	羅臼町
高橋水産有限会社	羅臼町
Hair Salon Yockey	東京都
羅臼アボロ石油株式会社	羅臼町
東京シティ日本橋ロータリークラブ	東京都
株式会社開発工業	斜里町
株式会社JVCケンウッド・デザイン	東京都
有限会社横山測量設計事務所	斜里町
株式会社CreativeFirst	千葉県
株式会社CNS	北見市
どうぶつの内科・皮膚科クリニック	帶広市
株式会社Bluedirection	神奈川県
Rujipart Photography	ニセコ町

2021年度 法人特別年会員

MOL 商船三井フェリー

City シティ環境株式会社

Yotsuba Trade
株式会社四ツ葉トレード

有限会社アウトバック

mont·bell

rebake

IAO PLANNING & DESIGN

SATOH SEIZAI

Sumitomo Pharma

光和メディカルクリニック
ヘルスケアセンター

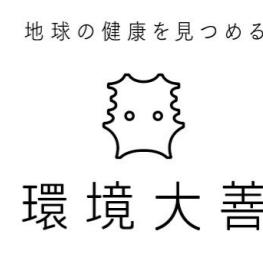
NATURAL

stanfoot

和床第一ホテル

SKE

Elreno Limited





会員の募集

私たちの活動を応援してくださるサポーターを募集しています。

皆様から募った会費や寄附金は、
知床を未来につなげるために役立てられています。



個人

■1年間応援	個人会員	5,000円/年
■生涯応援	個人終身会員	100,000円/生涯

法人

■法人特別年会員	100,000円/年
■法人年会員	20,000円/年



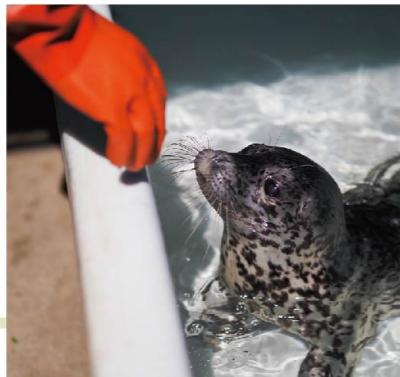
入会用サイト

入会、寄附の方法については知床財団の賛助会員のサイトをご覧ください。寄附も隨時承っております。

知床財団への会費、寄附は所得税、住民税、及び相続税における優遇措置を受ける対象となり、控除が受けられます。詳しくは知床財団ホームページ、または税務署にお問い合わせください。



知り



守り



伝える



組織概要

名称 公益財団法人 知床財団

設立 昭和63年(1988年)9月23日

設立者 斜里町・羅臼町

基本財産 4,500万円

所在地 〒099-4356 北海道斜里郡斜里町大字遠音別村字岩宇別531番地

目的 この法人は、知床半島及びその周辺地域の自然環境に関する調査・研究、自然保護の普及啓発などの事業を行い、もって広く自然環境の保全と利用の適正化に寄与することを目的とする。

(1)野生動植物の調査・研究

(2)自然保護の普及啓発

事業 (3)自然保護に関する諸団体との連携

(4)自然環境の保全管理及び公園施設などの管理運営受託業務

(5)その他この法人の目的を達成するために必要な事業

職員 45名(2022年3月31日時点)



Annual Report 年次報告 2021

発行：公益財団法人 知床財団
<https://www.shiretoko.or.jp>

発行日：2022年7月

Illustration : ETOBUNSHA